「左右」の修辞法の展開

――紫式部から後冷泉朝へ――

大塚誠也

平安時代の仮名作品には、「左右」の語の使用が確認できる。「左右」の語義は基本的に明快であるが、用例の中には漢文由来のやや特殊なものや、「ひだりみぎ」等と仮名表記されるものもあり、注意が必要である。

本稿は、その中でも特に紫式部の作品に見られる「左右」の用例と、その次世代にあたる後冷泉朝の諸作品の用例に着目する。それらの用例は「左右」の一語に複数の意味を重ね合わせる等、他の一般的な用例に比べ語の意味に広がりを持たせているように見受けられる。こうした用例は、漢文と仮名文、韻文と散文といった複数の文体の間を交錯するようにして展開したとおぼしい。「左右」の語は、先行研究においてほぼ論じられていないが、「左右」の用法に注目することは、仮名文芸の一様相の究明として有効であろう。

以下具体的に、「左右」の辞書的な語義、及び諸作品の用例数を押さえた上で、紫式部の著述における「左右」の用例から、後冷泉朝の著述における「左右」の用例へと順に注目し、その特徴を考察したい。考察の過程では関連する漢文や和歌の用例にも適宜触れつつ、「左右」という語が修辞によって複数の意味を担わされていく様相に注目する。

一　「左右」の語義と用例

「左右」は各辞書により、「さいう」「さう」「ひだりみぎ」の三つに適宜分けられ立項される。本論を始めるにあたり、まずはそれらを引用したい。主要な二辞書中から、平安時代以前の用例がある語義に限って引用するが、原則として漢語の「さいう」「さう」と和語の「ひだりみぎ」はほぼ同語と見なして列挙し、用例自体は省略した。

『角川古語大辞典』（角川書店、一九八四年）

《さいう》①ひだりとみぎ。両側。

《さう》①左と右。②人の傍ら。そば。また、傍らにいる人。そば

近く仕えている人。③あれやこれや。また、あれやこれやと言い立てること。否定表現を伴って、その必要もないほど当然だという意味で用いる。「左右なし」「左右に及ばず」の形が多い。

『日本国語大辞典』（小学館、オンライン版、二〇一五年七月三〇日参照）

《さゆう》①ひだりとみぎ。左側と右側。また、左翼と右翼。③（―する）そば。かたわらにあること。また、そば近く仕え補佐すること。または、その人。側近。

《そう》①左と右。さゆう。②そば。かたわら。また、そば近くに仕える者。さゆう。④あれこれ言うこと。とやかく言うこと。また、非難してあれこれ言うこと。

《ひだりみぎ》①左と右。左側と右側。さゆう。そう。②左にしたり右にしたりすること。あれこれとすること。多く「に」を伴って副詞的に用いる。かれこれと。あれやこれや。とやかく。とやこう。③舞楽で、左舞と右舞。左方の楽と右方の楽。

他の主な古語辞典でも、およそ同様の語義が確認される。平安時代までの語義をまとめると、①「左と右」、②「傍ら・側近」、③「あれやこれや」の三つに大別できるだろう。『類聚名義抄』の「左右」の項にも「トニカクニ　皆去声　タスケ　タスク」（天理図書館善本叢書、一九七六年）とあり、「トニカクニ」が③、「タスケ」「タスク」が②に通じる。この②③は派生的な意味であり、その経緯に留意したい。

②「傍ら・側近」は、中国の漢文由来の用法であり、『大漢和辞典』（修訂第二版、大修館書店、一九八九年）の「左右」の項にもこの語義と用例が載る。本朝では『日本書紀』にも同様の用例が確認できる。

③「あれやこれや」は、中国の用例に確認できず、本朝に用法の起源があるとおぼしい。『日本国語大辞典』の「そう」の項の語誌に指摘される通り、『万葉集』では「左右将為／カモカクモセム」（三九九）等と、「左右」に「どうにもこうにも」というような意味になる訓が複数あてられている。これらからは、本朝における「左右（ひだりみぎ）」の語と「あれやこれや」という派生的意味との繋がりがうかがえるのではないだろうか。平安中期になると、『小右記』の「但至于召上事只在勅定、左右難定申」（長徳三年〈九九七〉四月五日条）や、『御堂関白記』の「今日随定、後日可左右云」（寛弘三年〈一〇〇六〉正月一六日条）のように、漢文日記にもこの語義とおぼしい用例が散見される。

このように、「左右」には異なる由来の派生的意味が併存している。これらが文芸作品においてどのような修辞をなしているのか、各用例を調査する上で留意したい。

では、後冷泉朝以前の仮名作品における「左右」の用例を概観する。「左右」「さう」「ひだりみぎ」等、表記の異なるものを全てあわせてカウントし、先に示した①②③の意味に分けると、つぎの表

のようになる。用例の調査にあたっては、小学館の新編日本古典文学全集と角川書店の新編国歌大観の本文を用い、各語彙索引類と検索データベースを併用した。なお、「左右」の用例が確認できなかった『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『和泉式部日記』、並びに『万葉集』や勅撰集等の諸歌集は表から除外した。

表

	① 左と右	② 傍ら・側近	③ あれやこれや	総　数
大和物語	1	0	0	1
かげろふ日記	1	0	0	1
うつほ物語	48	0	1	49
落窪物語	1	0	0	1
枕草子	8	0	0	8
源氏物語	18	0	※4	21
紫式部日記	3	1	0	4
更級日記	2	※2	0	2
浜松中納言物語	1	1	0	2
夜の寝覚	0	1	0	1
狭衣物語	2	0	0	2
栄花物語	39	0	1	40
源順馬名歌合	1	0	0	1
赤染衛門集	1	0	0	1
東宮学士義忠歌合	1	0	0	1

※二つの語義を併せ持つと判断した用例は、複数回カウントした。

語義的な内分けは①「左と右」が圧倒的に多く、『大和物語』の「女の墓をばなかにて、左右になむ、男の墓ども今もあなる」（三七〇頁）等の物の両端の意や、『うつほ物語』俊蔭巻の「左、右の大将、御琴ども合はせて……」（①一一八頁）等の官職の左右が挙げられる。

派生的な語義の用例は、『うつほ物語』祭の使巻の「いまだ左右の念に預からず」（①四八八・四八九頁）等が③「あれやこれや」の意としてわずかに確認できる。このような状況の中、『源氏物語』『紫式部日記』等の特殊な数例が本稿の対象とする修辞的な「左右」であり、節を改めて詳しく論じたい。なお関連する用例として、「左も右も」という語句も五例確認できたが、全て次節以降で引用するため、右の表からは割愛した。

二　紫式部の「左右」の修辞法

紫式部は著述において、従来の一般的な「左右」の用い方をする一方で、いくつかの用例では複数の意味を一つの「左右」に重ね合わせるという手法を取っているように見受けられる。そしてこのような用例は、それぞれが用いられている箇所の内容と密接に関わる問題をはらむようであり、個々の検討を要すると考えられる。以下、紫式部の用例の中で修辞的な用法が確認できる『源氏』の四例

と『紫式部日記』の一例に的を絞り、順に検討したい。なお、「左右」について作品成立当時の表記、発音に遡ることは困難であるが、引用に際して「左右」の箇所は本稿末尾に示した底本の表記をそれぞれ用い、その参考とした。

まずは、『源氏』空蟬巻の小君の用例を検討する。

A小君を御前に臥せて、よろづに恨み、かつは語らひたまふ。（中略）姉君待ちつけていみじくのたまふ。「あさましかりしに、とかう紛らはしても、人の思ひけむこと避りどころなきに、いとなむわりなき。いとかう心幼きをかつはいかに思ほすらん」とて、恥づかしめたまふ。ひだりみぎに苦しく思へど、かの御手習とり出でたり。（①一三〇頁）

右の場面は、空蟬弟である小君が、光源氏からは「よろづに恨」まれ、空蟬からは「恥づかしめ」られ、「ひだりみぎに苦しく思」うという場面である。この表現は、「あれやこれや」という意味と、光源氏と空蟬の二者の板挟みにあっているという意味と、二つの意味が含まれていると考えられる。この、「左右」に二つの意味を重ね合わせるという技法は『源氏』以前には見出されず、紫式部により拓かれたものであるとおぼしい。ネガティブな状況に「左右」の語が副詞的に用いられる場面は、以後の紫式部の用例にも複数認められるため、その点にも留意したい。

つぎに、『源氏』須磨巻の和歌の用例を検討する。

Bその夜、上のいとなつかしう昔物語などしたまひし御さまの、院に似たてまつりたまへりしも恋しく思ひ出できこえたまひて、「恩賜の御衣は今此に在り」と誦じつつ入りたまひぬ。御衣はまことに身はなたず、かたはらに置きたまへり。

うしとのみひとへにものは思ほえでひだりみぎにもぬるる袖かな（②二〇三頁）

右の和歌は、須磨に蟄居している光源氏が、朱雀帝を悲喜こもごもに思い出した折のものである。下の句「ひだりみぎにもぬるる袖かな」は、左右の袖の意と、「あれやこれや」の感情によって落涙する意が含まれていよう。

このBの「左右」について久富木原玲氏は、つぎの赤染衛門の一首と、『万葉集』の二首を参考として挙げる。(1)

1ゆくみちのひだりみぎなるすまひ草かたわけてこそとるべかりけれ

（『赤染衛門集』五六六・ものへまうづるみちに、すまひ草のはなのいとおほかるを、ほとけにたてまつらんといへば、わがをらんとあらそふを見て）

2不相念人乎也本名白細之袖漬左右二哭耳四泣裳

アヒオモハヌヒトヲヤモトナシロタヘノソデヒツマデニネノミシナクモ（『万葉集』巻四・六一四）

3吾妹子之吾呼送跡白細布乃袂漬左右二哭四所念

ワギモコガワレヲオクルトシロタヘノソデヒツマデニナキシオモホユ（『万葉集』巻一一・二五一八）

久富木原氏は、紫式部の時代に「左右」の歌句が稀なことを指摘し、右の『万葉集』二首の「左右／マデ」という助詞が、当時あるいは「左右の袖を濡らした」と訓ぜられることがあったかもしれないと述べる。可能性の指摘として示唆に富むだろう。

ただ、稿者は紫式部の「左右」を考える上では、直接交流のあった赤染衛門の存在や、彼女の「すまい草」の歌における「左右」が、道の左右の意に相撲の左右の意を響かせていることの方に注目したい(2)。

つぎの『為信集』の歌も同様である。

4から衣ひだりもみぎもぬらすらんいまかたそではたれがためにぞ

（『為信集』二七・返し）

二句は「ひだりもみぎも」であり、解釈が難解な歌であるが、左右の袖がそれぞれ誰かのために濡れることを指摘した恋歌である。これは左右の袖が涙で濡れるという点でBの光源氏の歌と似通う。笹川氏が詳しく論じるように、『為信集』の為信は紫式部の祖父とも目されており、直接的な関係を想定しうる間柄である(3)。

紫式部は赤染衛門と交流があり、『為信集』の為信とも交流があった可能性がある。先後関係の推定は困難だが、二者の和歌とBの光源氏の和歌との同時代的な影響関係の問題は、留意されるべきであろう。赤染衛門の技法や『為信集』の発想は、紫式部の「左右」の修辞法について影響を与えた、あるいは影響を受けた可能性が想定される。

つぎに、『源氏』真木柱巻の鬚黒の用例を検討する。

C「なほこのごろばかり。心のほどを知らで、とかく人の言ひなし、大臣たちもひだり右に聞き思さんことを憚りてなん、とだえあらむはいとほしき。思ひしづめてなほ見はてたまへ。……」

（③三六三頁）

これは鬚黒から北の方への台詞であり、大臣達が「ひだり右に聞き思」うことを憚って、仕方なく新婚の玉鬘のもとへ行くのだという外出の言い訳である。この大臣達とは、玉鬘の養父である太政大臣光源氏と実父である内大臣（元頭中将）を指す。玉鬘の結婚に対し、巻の冒頭から二大臣の見解が対となって述べられていることからも、これは明らかである。この「左右」も、「あれやこれや」という意味と、光源氏と内大臣という二者の意味が含まれているといえよう。

そしてさらに、この二者が大臣である点も言葉遊びになっている。左大臣と右大臣を合わせて「左右大臣」と呼称することは当時一般的であり、物語でも「左右の大臣」（『うつほ』吹上下巻①五二一頁）、「左右大臣」（『源氏』行幸巻③二九〇頁）等の用例が確認できる。光源氏と内大臣は左右大臣ではないが、Cの「大臣たちもひだり右に聞き思さん」という表現は、左右の官職である大臣を意識したものであろう。鬚黒は通例の男君とは違い、愚直で戯画的な人物として描かれる傾向にあるが、彼の言い訳の台詞においてこのような修辞が用いられることは、その諧謔性を助長しているとい

える。

ちなみに、のちの『無名草子』の玉鬘評には、「世にとりてとりどりにおはする大臣たち二人ながら左右の親にて、いづれもおろかならず数まへられたるほど、いとあらまほしきを……」（一九四頁）とある。玉鬘の恵まれた境遇の説明として鬚黒の台詞が用いられていることは明らかであり、Cの「左右」の表現は、一方では玉鬘の境遇をいみじくも言い表したものであるといえよう。

つぎに、『源氏』若菜上巻の夕霧の用例を検討する。

D……女君の、今はとうちとけて頼みたまへるを、（中略）なのめならず、やむごとなき方にかかづらひなば、何ごとも思ふままならで、ひだりみぎに安からずは、わが身も苦しくこそはあらめ……（④三八頁）

これは女三の宮降嫁問題が出来した際の夕霧の心中思惟であり、現在は妻雲居雁と安定した関係にあり、女三の宮にかかずらっては苦難するだろうと思いを冷ますものである。この「左右」は「あれやこれや」の意味と、女三の宮と雲居雁という二者の意味が含まれる。

夕霧は「まめ人」と称される実直な人物であり、二人の女性との関係を忌避する姿勢は相応しいものといえる。しかし、のちの匂兵部卿巻でこの夕霧が、雲居雁と落葉の宮と「夜ごとに十五日づつ、うるはしう通ひ住」（⑤二〇頁）んでいることも見逃せないだろう。夕霧は実直さゆえに一度は思い冷ました二人の女性関係を、のちに実直さゆえに一五日ずつ通い住むのである。この匂兵部卿巻からDの夕霧の心中思惟を捉え直すとき、「まめ人」としての諧謔性が認められるのではないか。あるいは、作者紫式部の長編的構想として、実直な夕霧が二人の妻を持つというアイディアが、長らく念頭にあったのかもしれない。

最後に作品も用法も変わるが、『紫式部日記』の道長と親王達の用例を検討する。

E「年ごろ、宮のすさまじげにて、一ところおはしますを、さうざうしく見たてまつりしに、かくむつかしきまで、ひだりみぎに見たてまつるこそうれしけれ」と、おほとのごもりたる宮たちを、ひきあけつつ見たてまつりたまふ。（二一七頁）

これは酔った道長が、外孫である敦成・敦良両親王の姿を見て満悦するという場面である。「ひだりみぎ」には二人の親王という意味があることは確実であるが、和漢の史書の先例を調べると、他に「身近に」の意味も認められるのではないかと推測される。

例えば、『魏書』明帝紀には「明皇帝諱叡、字元仲、文帝太子也、生而太祖愛レ之常令レ在二左右一」とあり、明帝が幼少時、父帝に愛され常に「左右」、すなわち身近に置かれたとされる。『漢書』成帝紀にも「孝成皇帝元帝太子也（中略）帝愛レ之字曰レ太－孫常置二左右一年三歳……」と同様の記述がある。

本朝の『日本書紀』においても、垂仁天皇の幼少期の「天皇愛之、引二置左右一」（①二九八頁）や、誉津別命の「天皇愛之、常在二左右一」（①三〇〇頁）、欽明天皇の「天皇愛之、常置二左右一」

（②三五六頁）と同様の例が散見される。これらの「左右」も、天皇の身近に置かれるという表現であり、父帝の寵愛を表している。[4]

これらの用例から、史書において父帝の寵愛を受ける慣用的な表現として、身近という意味で「左右」が用いられていたことがわかる。『紫式部日記』は状況こそ違うが、こうした先例を踏まえて両親王へ祝意を持たせ、「左右」の表現を用いたのではないかと考えられる。Eの記事からは、道長が実際に「左右」の発言をした可能性と、記録者である紫式部が「左右」の脚色をした可能性と、二通りのケースが考えられるが、いずれにせよ紫式部は和漢の歴史に通じていたとおぼしく、[5]この表現を意識的に記述したと推察できる。

また、「かくむつかしきまで、ひだりみぎに」という表現は、満悦している道長の冗談であるが、所狭いほどや、煩わしいほどといったニュアンスは、身近であるという意味とも連続しているのだろう。

以上、『源氏』の四例と『紫式部日記』の一例を検討した。いずれも二つの意味を含むように用いられているが、大きく三つに分類することができる。第一に、A・C・Dのグループは、具体的な人物を対象としつつ、ストーリー上諧謔的ないしはネガティブな描写がなされている。第二に、Bは和歌中の用例であり、同時代の和歌との影響関係がある。第三に、Eは他と違い漢文的な用法を踏まえ、幼い両親王へ祝意を向けるように描かれている。紫式部が仮名文において、「左右」という語に対し異なる複数の修辞法を用いていることがわかるであろう。

これらの「左右」の技法は、パターンとして紫式部の次世代である後冷泉朝の文芸作品にその影響を認めることができる。次節では次世代の用例群をめぐり、さらに「左右」の修辞を検討したい。

三　後冷泉朝の「左右」の修辞法

本節では紫式部から強い影響を受けた作品、『更級日記』『浜松中納言物語』『夜の寝覚』と、散逸物語である『袖濡らす』を中心に扱う。これらの作品は先の表に示した通り、「左右」の用例数が僅少であるが、そのほぼ全てが修辞的に用いられており注目される。

まず、菅原孝標女作と伝わる『更級』の、遺児達の用例を検討する。

F母などは皆亡くなりたる方にあるに、形見にとまりたる幼き人々を左右に臥せたるに、あれたる板屋のひまより月のもり来て、児の顔にあたりたるが、いとゆゆしくおぼゆれば、袖をうちおほひて、いま一人をもかき寄せて、思ふぞいみじきや。

（三〇五頁）

G母亡くなりにし姪どもも、生まれしよりひとつにて、夜はひだりみぎに臥し起きするも、あはれに思ひ出でられなどして、心もそらにながめ暮らさる。立ち聞き、かいまむけはひして、いといみじくものつつまし。

（三一六頁）

Fは姉の死に際し、作者である孝標女が形見の遺児達を「左右に」寝かせ添い臥すという場面である。一人は袖で覆い、もう一人はかき寄せているので、遺児は二人だということがわかる。Gは孝標女が慣れない出仕の折、かつて姉の遺児達と「ひだりみぎに」添い寝していたことを思い出すという場面である。

この反復される「左右」はいずれも、二人の幼児を左側と右側に寝かせるという意味の他に、「身近に」という意味も含まれているのではないだろうか。添い臥しという行為が近接するものであるのに加え、二人の幼児に「左右」が使用される例は稀であり、先例としては前節のE『紫式部日記』中の「おほとのごも」っていた両親王が想起されるだろう。孝標女は日記中で『源氏』を耽読しているが、彼女は『紫式部日記』も読んでいた可能性が高く[6]、このような受容は十分ありえたと推察される。ただ、『紫式部日記』における史書に依拠した祝意は、『更級』では踏まえられていない。

また、ここで注目される用例として、『三宝絵』須太那太子の二児の場面もある。

「二人ノ子吾ヲ棄テ、誰ニ付テ去リヌルゾ。伏ス時モ居ル時モ常ニ左リ右ニ有テ、吾ガ手ニ菓子モノ有レバ悦ビテ来リ乞ヒ……」（五七頁）

これは須太那太子の二児が失踪した際、妻が常に身近にいた彼等を思い、嘆き悲しむ場面である。「常ニ左リ右ニ有テ」は、前節で見た史書のように「身近に」という意味であろうが、解釈の可能性として、「二人ノ子」の意味も包含していると見なしうる表現である。[7]

孝標女が『三宝絵』のこの箇所を踏まえているかは推測の域を出ないが、母子の離別と悲哀という雰囲気、二児とともに常に起居するという描写は、右の『更級』の二場面と似通っている。『紫式部日記』と併せこの『三宝絵』も、あるいは『更級』の「左右」に影響を与えた先例かもしれない。

つぎに同様の例として、『浜松』巻二の二児の場面を検討する。

Hこれ（引用者注―若君）をわがもとにて、姫君とひだりみぎに遊ばせて見まほしう、あかずおぼいたれど、なほ思ふやうありて、籠め置きたてまつり給へり。（一八五頁）

これは主人公の中納言が、別邸に住む若君を自邸に引き取り、児姫君とともに「ひだりみぎに」遊ばせたいと望む場面である。若君は唐后との密通により儲けた男児であり、尼姫君との子である児姫君と違い、おおやけにできない存在であった。

『浜松』は、『更級』仮名奥書や作中の内部的徴候から孝標女の作と推定されており、このHの表現についても『更級』のF・Gとの相関性を検討されるべきであろう。すなわちこの「ひだりみぎ」にも、「身近に」という意味と、若君と児姫君という意味が含まれているのではないだろうか。これは添い臥しではないが、「わがもとにて」「ひだりみぎに遊ばせ」という表現、及び自邸に引き取りたいというその願望から、「身近に」というニュアンスが読み取れる。ここまでくると『紫式部日記』の両親王の面影は薄くなるが、二児

をめぐる「左右」の用例として、一連の繋がりが想定される。(8)

つぎに、『夜の寝覚』巻四の、寝覚の上の継子達の用例を検討する。

Ⅰ「さばかりおほけなき思ひ絶ゆべくもあらぬ宰相中将を、片端に置きて、はらからとも言はじ、大納言も、思ふままに、くまなき心ある人なり、かかる人々を左右に置きたまひて、我はかすかに夜を明かいたまはむこそ、うしろめたけれ。」

（三五九・三六〇頁）

右は、男主人公である内大臣が、二人の婿の存在を危惧する台詞である。この時、寝覚の上のもとには故老関白の遺した二人の継娘がおり、それぞれ宰相中将と大納言を婿取っていた。内大臣は、二人の婿が同邸に住む寝覚の上に懸想するだろうと心配するのである。

この「左右」の用例も、「身近に」という意味と、宰相中将と大納言という意味と、二つの意味を含んでいるように解釈できる。「左右に置」くという表現や、距離の近さを危惧することからは、先ほどと同様「身近に」というニュアンスが読み取れる。このⅠは、ネガティブな状況や色恋にまつわる煩わしさという点で『源氏』のA・C・Dとも共通するが、「左右」に「あれやこれや」のニュアンスは認めづらい。

『寝覚』も『更級』仮名奥書に孝標女の作と伝わっており、F・G・H・Iの三作品の用例群からは、あるいは孝標女は「左右」の用法として、「身近に」という意味を多用する書き手であったかとも考えられるのではないだろうか。その場合、「あれやこれや」の意味を多用した紫式部とは、対照的な書き振りであるといえよう。

最後に、散逸物語である『袖濡らす』について検討したい。『袖濡らす』は『物語二百番歌合』に一〇首、『風葉和歌集』に一五首採られており、中編クラスの分量であったと推測される。『狭衣物語』に「『袖濡らす』といふ物語の承香殿女御」（巻三②一八一頁）、「法音寺とかや、袖濡らす宰相の通ひたまひし所」（巻四②三七六頁）とあるため、『狭衣』以前の成立であり、平安後期から鎌倉にかけて知名度のあった作品かと考えられる。

物語の内容としては、男主人公の宰相中将と女主人公の中納言の君、他複数の女君等が登場し、最終的に宰相中将は太政大臣となり、中納言の君は准后となることが現存資料から確認できる。松尾聰氏等により具体的な復元研究もなされている。(9)

『袖濡らす』における「左右」との関連箇所は、その物語名自体である。当時の物語名は長短等のバリアントが頻繁に発生するものであり、『袖濡らす』も『物語二百番歌合』の後百番巻頭では「左毛右毛袖湿」と記載され、同六四番右の詠者名「関白」には注記として「左も右も袖ぬらす宰相中将是也」とある。(10)ここから、『袖濡らす』の物語名は「左も右も袖濡らす」という和歌的表現の一部であることがわかる。

この「左も右も袖濡らす」という表現の典拠は、松尾氏等が指摘する通り、本稿二節で引用したB『源氏』須磨巻の「うしとのみひと

へにものは思ほえでひだりみぎにもぬるる袖かな」であるかと考えられる。松尾氏は二人の女性のために流す涙という可能性や、一人の女性のために流す恋慕や恨みの涙という可能性を指摘しているが、当時の物語名の傾向として、色恋の涙という線ではほぼ間違いないだろう。そして「左も右も」に対する氏の解釈も妥当であり、やはり左右の袖という意味に加え、「あれやこれや」という意味、または特定の二人の恋人という意味等、複数の意味が含まれていると考えられる。(11)

ちなみに本稿二節に引用した『為信集』二七番の「から衣ひだりもみぎもぬらすらんいまかたそではたれがためにぞ」はマイナーであるが、『袖濡らす』に関しては『源氏』と同程度に内容の重なりが認められる。この歌は典拠とは考えられないまでも、何らかの経緯で『袖濡らす』作者の目に触れていたかもしれない。(12)

また、この『袖濡らす』の「左も右も」という七音の表現に関しては、成立時期とおぼしい後冷泉朝において、つぎのような相関性を有する和歌の用例も確認できる。

5常夏はいつともわかぬ花なればひだりも右もひとしとぞ見る
（『或所歌合天喜四年四月』一二・六番判詞）

6なつかしき花橘の香にしあれば左も右もわかずこそしめ
（同一八・九番判詞）

7あやめぐさひだりもみぎもかたひけばいとまもあらじ君がみごもり（『皇后宮歌合治暦二年』一六・しもつけ・これをききて）

いずれも歌合における詠作であるが、5・6は判者「式部大夫」が判詞に代えて詠んだ和歌であり、7は歌合の果てた後、人々に菖蒲が配られたことを聞いた下野が詠んだ和歌である。いずれも歌合のつがいである「左右」を「左も右も」と詠んでいる。成立の先後関係という問題は残るが、当時「左も右も」という歌句が局所的に流行した可能性が考えられる。この時代の文芸圏において、歌合と物語創作はともに高貴な女性のもとで盛んに行われており、これらは近しい位置にあるといえよう。

以上、後冷泉朝における「左右」の用法を、主に紫式部からの影響という視点から検討した。『更級』『浜松』『寝覚』はいずれも「身近に」の意と特定の二者の意を重ねて用いている。特に『更級』『浜松』は『紫式部日記』と同じく兄弟の二児を指しており、対する『寝覚』は『源氏』の用例と状況が似通っている。『袖濡らす』は和歌的表現の系譜に連なり、左右の袖の意と「あれやこれや」ないしは特定の二者の意とが重ねられていたと推察され、『源氏』の作中歌からの影響と、同時代の歌合関連歌との相関性がともに注目される。

四　まとめ

本稿では「左右」の用法をめぐり、具体例の精査をもってその修辞を論じた。「左右」は基本的に語義の明快な語であるが、『源氏』をはじめ注目した用例群からは、場面に即して二種類の意味を重ね

合わせる修辞法が複数看取された。

紫式部の著述においては三つのパターンが確認でき、次世代の後冷泉朝の著述においてはおよそ二つのパターンが確認できた。この二世代は約五〇年隔たっているが、「左右」の修辞はおよそ継承されているといえるのではないだろうか。もちろん、『源氏』中の本文表現や引き歌表現等が、のちの作品に引用される例は無数に存在する。しかし、「左右」の修辞のように、漢文の影響や和歌との関わり等、複数の異なる系統が仮名散文において混在するケースは、稀に見るものといえるだろう。

「左右」に近似する例としては、「東西」「あふさきるさ」の二語が挙げられるものの、「東西」は『うつほ』蔵開下巻の「東西知らずなむ」（②五三一頁）、『うつほ』国譲上巻の「東西知らず侍りて」（③一〇八頁）、『枕草子』の「東西せさせず乞ひ取りて」（一三七頁）の三例が数えられるのみであり、「あふさきるさ」は散文作品では『源氏』帚木巻「とあればかかり、あふさきるさにて」（①六二頁）の一例のみである。これらと比較しても、「左右」の修辞は、継承や変遷といった側面が特に強いと考えられる。

また、「左右」の修辞は、紫式部をルーツとし、孝標女をそれと比較するような書き手の問題として捉えられる一方で、紫式部や赤染衛門の交流、後冷泉朝における女房文化圏内の流行というような、書き手の交友圏の問題としても捉えられるものである。関連する先行研究として、一条朝については中西智子氏の論稿、後冷泉朝については久下裕利氏、和田律子氏の論稿等が挙げられるが[13]、後冷泉朝の女房文化圏に関しては、稿者も藤原長家をめぐる論稿や、大弐三位藤原賢子をめぐる論稿[14]において研究を進めている。本稿の「左右」の修辞法をめぐる議論も、これらと軌を一にするものである。

従来、「左右」の語はほとんど論じられてこなかったが、平安時代の仮名作品においては、当時の文芸活動の一様相を認めうるものであった。ちなみにこの後、中世以降の「左右」の用例からは、「あれやこれや」から派生したと考えられる語義、「とかくの指図。指令。命令」「善悪、良否、是非などの裁定。あれかこれかの決定」（『日本国語大辞典』「左右（さゆう）」項）等を確認できるようになる。後世においても、このような語義の拡大があることについて、最後に付言しておく。

※引用本文は、「左右」とそれに類する部分を除いて基本的に「新編日本古典文学全集」に依ったが、和歌資料は「新編国歌大観」に、『三宝絵』は「新日本古典文学大系」に、『魏書』『漢書』は「和刻本正史」に、それぞれ依った。

※「左右」の表記については、『源氏物語』空蟬・須磨・真木柱巻は大島本を、『源氏物語』若菜上巻は明融本を、『紫式部日記』は黒川本を、『更級日記』は御物本を、『浜松中納言物語』は榊原家旧蔵本を、『夜の寝覚』は松平文庫本をそれぞれ用いた。

注

（1）久富木原玲「歌人としての紫式部―逸脱する源氏物語作中歌―」（『源氏物語研究集成』第一五巻、風間書房、二〇〇一年一一月）。

（2）ちなみに当時の歌合における「左右」の用例は、「左右くらぶるこまのあしはやみわがかたにうつかちぶちをみよ」（『源順馬名歌合（二十巻本）』四）、「ひだりみぎひくてもたゆくたついとはいづかたへかはよるべかるらん」（『東宮学士義忠歌合』八）である。

（3）笹川博司『為信集と源氏物語―校本・注釈・研究―』（風間書房、二〇一〇年）。なお、笹川氏もこの左右の袖の和歌について、為信と紫式部間の影響関係を指摘している。

（4）ちなみに『古事記』には、小楯連が二人の王子を見つける場面に「其二柱王子坐二左右膝上一」（三五六頁）とある。

（5）浅尾広良「〈紫式部〉と『日本紀』―呼び起こされる歴史意識―」（『〈紫式部〉と王朝文芸の表現史』森話社、二〇一二年）等。

（6）小谷野純一「「更級日記」に於ける「紫式部日記」受容の問題―上洛後の記の世界をめぐって―」（『平安文学研究』第六一輯、一九七九年六月）、和田律子「宮仕えの記―物語の男君―」（『藤原頼通の文化世界と更級日記』新典社、二〇〇八年）等。

（7）ちなみに出典である『六度集経』須太拏経にも、「吾れ坐すと兒立ちて各左右に在り、身に塵有るを観て競ひて共に拂い拭ふ」（『國釋一切経』本縁部六、大東出版社、一九三二年）とある。

（8）ちなみに『浜松』のもう一例は「さうの楽屋」（巻一・五八頁）であり、修辞的でないため考察対象から外した。

（9）松尾聰「袖ぬらす宰相中将の物語」（『平安時代物語の研究』改訂増補版、武蔵野書院、一九六三年）、小木喬「袖ぬらす」（『散逸物語の研究　平安・鎌倉時代編』笠間書院、一九七三年）、樋口芳麻呂「『源氏物語』と散逸物語―『左も右も袖ぬらす』物語を中心に―」（『『源氏物語』とその受容』右文書院、一九八四年）。

（10）前掲（9）松尾論文に指摘があるが、『明月記』貞永二年三月二〇日条にも「左右袖湿」（国書刊行会、一九七〇年）とある。

（11）ちなみにのちの『とりかへばや物語』では、「左右の袖を濡らしわびつつは」（二七〇頁）、「うれしういみじきに左右の袖濡るる心地して」（二九八頁）、「左右にて生ほしたてまつりたまふ」（五一一頁）と、「左右」が袖に二例、幼児に一例用いられており、本稿で論じた修辞法の積極的な摂取を見て取れる。

（12）前掲（3）笹川著書も、『為信集』、『源氏』、『袖濡らす』の左右の袖の表現を、併せて検討している。

（13）中西智子「紫式部と伊勢大輔の贈答歌における『源氏物語』引用―「作り手」圏内の記憶と連帯―」（『日本文学』第六一巻第一二号、二〇一二年一二月）、久下裕利「雪と月と」（『王朝物語文学の研究』武蔵野書院、二〇一二年）、和田律子「藤原頼通文化世界における『枕草子』摂取の一様相―『更級日記』を中心に―」（『古代中世文学論考』第二九集、二〇一四年四月）等。

（14）大塚誠也「『更級日記』の一基底―藤原長家をめぐって―」（『日記文学研究誌』第一六号、二〇一四年六月）、大塚誠也「『狭衣物語』の「大弐三位」と大弐三位藤原賢子―物語の結末部に関して―」（『国語と国文学』第九三巻第四号、二〇一六年四月刊行予定）。